

MM116-075 『絵本千賀浦』 —翻刻資料—

寛延三(1750)初春 安永七(1778)戊戌歳改正／大坂書林 心齋橋筋轉勞町南江入本屋又兵衛板。作者 田中羅山、畫工 寺井重房、彫刻 藤村忠兵衛。

絵本千賀浦序

蓬が窓乃本に古へ今乃文をくりひろげ、見ぬ世の人を友として獨樂乃境にだに散かふ机上の塵を拂ひ侍れば、誰人乃書捨しやらん反古一卷侍る。これを見れば耳近き世乃諺を物して教草と成べき数々になん侍れば、我にひとしきおろかなる人の為にもと思ひ寄心の花を寺井氏乃手にひらかせて三巻とハ成けらし。年乃はつ春 探美亭 羅山

〔馬玩具に跨遊ぶ童子圖繪：上一才〕

01 堪忍が百貫するとは忍ハ一字千金の兵法なりといふより出たりいづれ万事に堪忍さへすれば一生身をあやまつ事ハなきもの也。〔上一ウ 78 / 79〕

02 鑰の穴から天をのぞくとハ世界乃廣大なる事をしらず万事我釜の前より外をしらぬ小智小見なる人に譬たる詞なり。〔上二ウ・80 / 81〕

03 猿猴が月とたとへば矢瀬大原乃黒木賣賤の女が殿上人乃やんごとなき御ありさまに思ひかけて戀なやむと軍術武藝ハ怪我のもとひと人に異見する臆病な浪人が高知行をのぞむとハ身の程をしらず愚痴なる事月をとらんとする猿乃ごとし。〔上三・82 / 83〕

04 井の中乃蛙大海を知らずとハおのれが小智をもつて、他の大智をはからんとするたとへにいへり。七書の素讀したわろが世界の軍者ハ我計と心得、孔明が八陣も古風で役に立ませぬ、正成が千早の備もあれでハござらぬといふたぐひなり。〔上四ウ・84 / 85〕

05 落花狼藉とハ女中の花見幕打はへておもしろふ樂しみて居る所へ近付乃むくつけ男乃來りて、提重喰あらし、小筒乃底をたゞきて嘯美といふて立帰るハ誠に落花狼藉なるもの也。〔上五ウ・86 / 87〕

06 山の芋が鰻になるとハ万物變化乃理をいふ也。雀海中に入て蛤となる。皮草履乃古きが薙刀と變じ、むかし作りの頑親父が毛虫に化するも、梶原が蚰蜒になれるたぐひなるべし。〔上六ウ・88 / 89〕

07 世ハもと忍びとハ新古今にながらへば、又此ごろや忍バれん、うしと見し世ぞ今はこひしき。むかし乃全盛の花ちりて何かにおびしきに付て、いにしへ乃事を思ひかぞへて戀しくおもふ事にいへり。〔上七ウ・90 / 91〕

08 和光同塵とは我智恵乃光をかくして外へあらハさぬを和光といふ也。世俗の塵にまじはりて我を我とせず、少しも我意なふして世をなんともなふ暮すを同塵といふなり。〔上八ウ・92 / 93〕

09 鹿を遂獵師ハ山を見ずとは目前乃利欲にまよひて後々は小利大損の蹄にかゝる事をしらざる類にいふ詞也。つゝしむべし。〔上九ウ・94 / 95〕

10 狂人走れば不狂人も走るといふは今を盛と悪性ぐるひする人にさま／＼異見すれども聞いれぬをいきどほり色を違へてあらそひのゝするハ不狂人も走るとひとしかるべし。〔上十ウ・96 / 97〕



11 瓢箪へうたんで鯨なまずおさゆるといふハ氣のぐれつく人乃心と虚をいふ人の詞とは慥たしかならず。捉まへ所なき事、瓢箪へうたんでおさゆる鯨なまず乃ごとし。〔上十一ウ・98〕

12 飛とで火に入夏なつの虫むしといふハ道ならぬ不義の財宝をむさぶり、我身乃亡ぶる事をしらざるものたとへなり。古今集に夏のむし何かいひけん心から我もおもひにもへぬべらなり。〔上十二オ・99〕

13 天し知る地ちしるといふハ後漢ごかんの楊震やうしんといふ人、王密わうみつがをくりし黄金わうごんを受うけずして、かくいひしより出たり。親父おやちはしられぬと思ひて盗ぬすづかひにする。飛物とび達たち、楊震やうしんが曰知乃事をよく／＼わきまへつゝしむべし。〔中一・100／101〕

14 持仏堂ちぶつだうと姑しうとめは置所をきがないといふハ人の家乃内にすぐれて尊たうときものなればかくいふなり。しかるをあしく心得てさせる役にも立ぬものなれど、家内かになくて叶かなハぬものなれば、置所をきなくて迷惑めいわくするところへるは大きにあやまりなるべし。〔中二ウ・102／103〕

15 重荷おもにに小付ちりといふハ後撰ごせん乃哥うたに、年の数かずつまんとすなる重荷おもににおもにはいとゞ小付ちりのこりもそへなん。貧ひんな人に年子の出来ると白髪しらを染そめて傾城けいせいぐるひをせらるゝ親父おやちを持た息子むすことハせんかたなき重荷おもにに小付ちりものなるべし。〔中三ウ・104／105〕

16 塵ちりがつもつて山しだいと成せいとハわづかなる物にても次第しだいにつもれば大きに成せいといふたとへ也。千万両乃金も錢せん壺文こばんのつもりてなれる物也。壺文こばんも小判はしの端はしくれ、大切にすべき事なり。〔中四ウ・106・107〕

17 一ひとをもつて万まんをしるといふハ物の惣体さうたいを見ざれども、其端はしを見て其奥おくをしる事にいへり。立たきつた後家ごけの浅黄裏あさぎうらが紅絹裏べんに變へんずるを見て、和尚おしやう様乃五重相傳ごちゆうさうでんの奥儀おくぎがしれましたと、かしこき人のいハれしもさる事ぞかし。〔中五ウ・108／109〕

18 急いそがばまハれといふを急いそげバまハるといふハあやまり也。此心ハ古哥こに、武士ものゝぶ乃矢やばせの船ふねハはやくともいそがばまハれ勢多せただの長ながはし。右の哥うたより出たり。勢多せただからげといふ事も此所をまハる時よりいひそめ侍りけるとかや。〔中六ウ・110／111〕

19 蓼れうくふむしも好じやう／＼とハ浄じやうりかたりの子こに浄じやうりをいやがつて、諷うたひにうき身をやつすもあり。親代々の法ほつげしやう花宗ねんぶつに念仏ねんぶつおもしろがる人もあり。甘あまいものを好人すくあり。苦にがいものをすく人あり。いづれも天性せい乃自然しぜんなれば、兎角とかくいひがたし。〔中七ウ・112／113〕

20 念力ねんりき岩いわを通とすといふ事はもろこしの李將軍りしやうぐんが虎とらに似たる岩いわを射いたる事より出たり。一切の事に念慮ねんりよをかけて、おこたりにければ其事成就じやうじゆするといふたとへ也。蚤のミの息いきが天てんへのぼるといふ事おもひ念すべし。〔中八ウ・114／115〕

21 麻あさにつく蓬よもぎといふハよき人に立たまじわれバ自然しぜんと身も心も正ただしく成事たふにいへり。富貴ふうきなる人に使つかはるゝ在所ざいしよ育そだちの長太郎ながたろうも見るを見まねにおのづから風流ふうりゆうに成事後々ハ歴々の手代たしろになる類たぐひをいふなるべし。〔中九ウ・116／117〕

22 論語ろんごよミの論語ろんごよまずといふハ論語ろんごをよミて聖人せいじん乃道みちをしれども、其身おこなに行ふ事をしらざる人をいふ也。論語ろんごの素そよミだにせぬ人の論語ろんごよミに異見いけんせし時、彼人かのかくぞよミける。論語ろんごよミの論語ろんごしらずハうらやまし。論語ろんごよまず乃論語ろんごしらずハ。〔中十ウ・118／119〕

23 犬いぬの年としの寄よりたといふ事ハ年寄さいのうても何乃才能むゑきなく、無益むゑきの人をいふなり。西園寺内大臣さいをんじないだいじん老僧らうそうを見てあな尊たうと乃氣色けしきやとて礼らいをなし給たまふを資朝卿すけともきやう見て後日ごにちにむく狗いぬのあさましく老をひさらばひたるを引ひせて此氣色けしきとふとく見みへて候たいふへとて内府ないふへ参まゐらせられける。此事より出たる詞也。〔中十一・120／121〕

24 馬うまの耳みみに風かぜとは聞入きこぬ人に異見いけんするハ聾つんぼうをつれて時鳥ほととぎすを聞きに行いがごとき譬たとへなり。〔中十二ウ・122〕

25 鯛たいの頭かしらも信心しんじんからとは一切さい乃物ものハもてなしにて尊たうとく成せいたとへなり。薬賣くすりうりの口上こうと丸薬ぐはんやくを

金銀乃箔にてまろばかすハ人乃信仰をまねく方便なり。〔下一・123〕

26 陰徳あれば陽報ありといふハ人乃しらざる育をほどこせば自然と陽なる果報を得る事あるをいふ也。陰徳は陽徳にまさる事十倍なり。〔下一ウ・124 / 125〕

27 鳥ない里の蝙蝠といふハひら仮名乃妙薬本一冊を持って片山家にて醫者と出かくれバ肉付乃薬師様ともてなさるゝ類ひをいふ也。古哥に人もなく鳥もなからん嶋にては此かふもりも君をたづねん。〔下二ウ・126 / 127〕

28 お髭の塵を取とハ丁謂といふもの萊公が髭をぬぐひしより出たる詞也。旦那／＼とそやしたて常に指の股をひろげ追縦輕薄にて身を過る臺頭末社乃たぐひをいふなり。〔下三ウ・128 / 129〕

29 蟻螂が斧とは齊の莊公乃事より出たり。女子供にても直下に見てあなどるまじき。たとへなれども今ハ我力に及ばぬ事を願ふものをあざける事にもいひならハせり。〔下四ウ・130 / 131〕

30 金言耳に逆ふとハ年寄て万事にこなれたる人乃いふ事は血氣さかんの若人乃耳に逆ふものなれども至極ハ我身の為に成事多きもの也。良薬は口に苦けれども病に利めあるがごとし。〔下五ウ・132 / 133〕

31 錦を着て故郷へ帰るといふハ傾城乃買置から身体を棒にふりし放子が糠味噌汁乃味をおぼへむかしハ抛入て詠し花乃壺文賣より段々出世してふたゝび以前の富貴に立帰るたぐひをいふなり。〔下六ウ・134 / 135〕

32 鷹ハ飢ても穂ハつまずとハおのれが餌食の小鳥より外米の穂も喰事なし。義を守る誠乃武士ハ饑渴に及べども不義乃知行俸禄ハ受ずといふこれらのたとへなり。〔下七ウ・136 / 137〕

33 云ぬはいふにまさるといふハ風雅集にいふよりもいわで思ふハマさるとて問ぬハとふにおとりやハせじ。物事に出すぎたる者が夜前淀乃わたりにてほとゝぎすが一ト聲音づれましたが年寄こいと鳴ましたと子細らしくいふたぐひなり。〔下八ウ・138 / 139〕

34 鳶が鷹を産だといふはいやしき人が貴きを産出せしたぐひまれなる事にいへる譬なり。日雇乃六兵衛が娘が舞子から出世して若殿を産ましたといふたぐひなるべし。〔下九ウ・140 / 141〕

35 毛を吹て疵をもとむとハ古哥に直す木にまがれる枝もあるものを毛を吹て疵をいふがいりなき人の身乃上の非を正さんとしてかへつて我十分乃非をあらハすたぐひをいふなり。〔下十・142 / 143〕

作者 田中羅山
畫工 寺井重房
彫刻 藤村忠兵衛

寛延三初春

安永七戊戌歳改正

大坂書林 心齋橋筋轉勞町南江入 本屋又兵衛板〔下十一ウ・144〕

《完了》